

【研究主題】 「ふるさとに学び ふるさとへ心を寄せる」総合的な学習の時間をめざして
【副題】 (なし)

【学校・団体名】 長野県上伊那郡飯島町立飯島中学校
【役職名・氏名】 校長 酒井 修一

1 研究のねらい

(1) はじめに

「ふたつのアルプスが見える町」(飯島町)にある本校は、全校生徒200名あまりの小規模校である。飯島町は、県内でも有数の米の産地であり、春には水張り田に周囲の山々が映し出され、秋には伊南地域の米がライスセンターに集まってくる「飯」の町でもある。そんな自然豊かな町で生徒達は**学校教育目標「明るく心豊かに 健やかに逞しく 自ら求め自ら学ぶ」**のもと、地域の方に支えられながら学校生活を送っている。

本校での総合的な学習の時間は、その運用と計画について学年ごとに任されており、授業時間もスライド内に設定されている。学年に探究課題の設定を任されているため、学年行事や教科等と併せて探究活動ができるという良さがある一方、課題もある。中でも、以下の2点が特に課題と感じている。

【課題1：特別活動に流用されることが多い。】

本来は特別活動として扱うべき内容を、総合的な学習の時間の中で行わざるを得ないことも多く、生徒自らが課題を設定し、試行錯誤しながら学習を深めるとい**う探究活動の時間が削られているという現状がある。**

【課題2：生徒が本当に主体的に探究課題を決めて活動しているのだろうか。】

早々に活動内容を**教師主導で「～をしよう！」と決めてしまうか、生徒達にやりたいことは何かアンケートを採り多数決で決めてしまうかのどちらかで決定する**ということがおこりがちである。こういった形で決まった探究課題・活動では、生徒が主体的に取り組んでいたとは言い切れない。

そこで、この2点を重点課題とし、2学年会では、生徒が**主体的に探究する「ふるさとに学び ふるさとへ心を寄せる」総合的な学習の時間のあり方**を模索していきたいと考え、研究を進めることにした。

2 研究経過および内容

(1) 仮説1

つけたい力を明確化し、学年行事と関連付けた年間計画を立てれば、学年行事も総合的な学習の時間も成立するのではないだろうか。

① つけたい力の明確化

本校における総合的な学習の時間の目標は以下の通りである。

【 目 標 】

探求的な見方・考え方を働かせ、ふるさとの人、もの、ことに関わる総合的な学習を通して、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し、自己の生き方を考えることができるようにするため、以下の資質・能力を育成する。

- (1) 課題の解決に必要な知識及び技能を身につけるとともに、ふるさとの特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気づく。
- (2) 課題解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に考えたりする力を身につけるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身につける。
- (3) 探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育てる。

2学年ではこの目標を具現化するため、以下のように探究課題を設定し、総合的な学習の時間でどんな力をつけたいのかを考え生徒と共有した。

【 探究課題 】

自分の「道」を探し、
自分の「道」を歩いていける生徒になる。

【 つけたい力 】

- ①ふるさとの特徴や良さに気付く。
- ②自分自身を知る。
- ③ふるさとや仲間へ感謝ができる。
- ④社会の一員として、何ができるのか考え、実行することができる。

特に「②自分自身を知る。」は、学校目標にはない文言であったが、自分の「道」（2学年探究課題より）を考えるためには、まず生徒自身が自分について知ることが大切だという意見から明文化した。

また、つけたい力を決めだした後、具体的な活動内容を考えていく場面で、自分たちで活動内容を決めることに対して戸惑いを隠せない生徒が多くいた。コロナ禍で計画した行事の縮小や中止を経験してきた生徒達は、自分達の行事を企画運営することを諦めているのではないかと感じた。そこで、学年行事では、「**まず自分はどう思うのか**」「**何がしたいのか**」といった自分にベクトルを向ける必要があると学年会で話し合い、学年行事として年4回「格好いい大人講演会」を職員から企画し、生徒の主体性を伸ばす心の教育を並行して行うことにした。

② 年間指導計画

4月に、生徒達に「飯島町の良いところは？」と質問すると、答えに戸惑う生徒達が大多数であった。これには職員も驚きを隠せなかった。1年次の町内自然体験学習の経験が「ふるさとの良さ」に結びつく段階には至っておらず、もう少しふるさとについての学びが必要だと感じた。そこで、以下3点について配慮し、年間計画を立てることにした。

- 1) 学年行事と各単元が関わるように設定する。
- 2) 各教科でふるさとに関わる題材を扱うようにする。
- 3) 年間を通して「ふるさと座談会」を行い、地域の方と意見交換する場を設定する。

特に1学期の学年行事、町内で行う職場体験学習では、例年キャリア・進路学習のねらいが強く、総合的な学習の時間なのか特別活動なのか、道徳なのか曖昧になっていた。そこで今年の職場体験学習の目的を、

- 飯島町で働く大人の姿を見たり、勤労体験をしたりすることを通して、
- ①町の人や産業、農業、商業等への理解を深め、郷土愛を育む。

- ②生徒自身の自己理解を促し、その後の学校生活をより豊かなものにする。

とすることで、事前学習、事後報告会等は「ふるさとを知る」ことにつながる活動となり、**生徒も職員も総合的な学習の時間の目的を見失わずに取り組むことができる**と考えた。

また体験学習中には、その事業所とふるさと飯島とのつながり（関わり方）に焦点を当てて**体験レポート**を書き、体験後にそのレポートを発表し合うポスターセッションを織り込んだ座談会を行って、「ふるさとの良さ」とは何かを考えた。

そして2学期には、飯島町の良さは永遠に続くのかを考えるため、資料の読み取りや座談会を行い「**ふるさとの強みと弱み**」に自分たちはどう向き合うかを考えた。そこで出た疑問と、学年行事である傘山登山とを関連付け、ふるさとの自然を守る活動を行っている方や飯島町をPRする活動を行っている方々を外部講師にお招きし、座談会を行った。2学期は生徒のふるさとの対する想いが深まっていき、**生徒達自ら3学期の単元を「ふるさとに貢献する」とし、探究活動を進めることと設定した**。さらに、飯島町をPRする活動を行っている方の話から、飯島町と春日大社とのつながりを知った生徒は、**3年次に行われる学年行事の京都・奈良への修学旅行で、「ふるさと飯島をPRすることで、飯島町に貢献したい。」という願いを持つようになった**。そして、「ふるさとのために何ができるか」、そのためのアプローチとして、「イベントに参加する」「名物をつくる」「PR活動をする」「ボランティアをする」という4つの大きなグループに分かれ、各グループの中で、さらにいくつかの小グループに分かれ、1つの目的に向かって探究活動を進めている。それぞれのグループには、教育委員会や役場の地域創造課の方々、地域おこし協力隊の方や地域ボランティアの方が指導や助言をしてくださっており、今後さらに具体的に探究活動を進めていく予定である。

(2) 仮説2

ふるさと座談会、格好いい大人講演会を企画実行することで、主体的な探究活動になるのではないかと。

① ふるさと座談会

年6回のふるさと座談会では、3分野の方々とつながり、意見交換をすることで学びを深めた。特に

第1回から第2回にかけて、生徒の感想が大きく変化し、その学びの深まりを見てとることができた。

i 地域おこし協力隊とつながる

【第1回ふるさと座談会

～飯島町のいいところ～

(4月28日)

座談会のはじめ、地域おこし協力隊の方から「大人になっても飯島町にいたいか」と聞かれ“Yes”と答えた生徒は、69名中わずか6名であった。しかし座談会後に感想を聞くと、「知らなかった飯島町の良さを知ることができた。」「飯島町にずっといるのも悪くはないかも。」など気持ちに変化があった生徒もいた。



【第2回ふるさと座談会

～飯島町で働く～

(6月16日)

前半は学年行事であった「職場体験学習のまとめ」をひとりひとり発表し、飯島町の事業所の魅力を学年全体で共有した。後半は3名の地域おこし協力隊の方と座談会を行った。「仕事のやりがい」や「他の事業所との繋がり」などの話を聞きながら「飯島町ではたらくこと」について考えを深めた。



「飯島には何もない。」と言っていた生徒(感想の変化のBさん)は、第2回の座談会后、校内での第3回以降の座談会を含めた学年の「総合的な学習の時間」のリーダーに立候補し、企画運営を進めていった。また、校外では地域の青年会議所が主催する伊南地域の未来についての意見交換会「大人が学ぶミライスクール」に、中学生代表として参加することになった。

＜第1回から第2回 Bさんの感想の変化＞

飯島なんて買い物もスグ行けないしつままないと思っていました。でも今日考えてみると、自分が思っていた以上にいいところができました。大人になったら色々なところを見て飯島に帰ってきたいです。

飯島には何もないと思っていたけど意外に色んなところがあって、「飯島って意外と良いところなので、は!？」と思えた。これからは飯島の不満を見つけるのではなく、良いところを探して、飯島を大切にしていきたいです。

ii 行政の方とつながる

【第3回ふるさと座談会

～飯島町の強みと弱み～

(8月24日)

第3回以降の座談会は、立候補により生徒4名がリーダーとして企画運営を行うようになった。リーダー達からの提案で、飯島町町勢要覧から、飯島町の現状を知る活動を行い、飯島はこれからどうなるのかを班で話し合う中で、「このまま高齢化が進み介護施設が増えるのでは?」「自然を管理する人がいなくなり、自然が荒れてしまうのでは?」といった意見や質問が出た。行政や大人と直接対話することができないかと生徒から要望があり、役場の地域創造課の方、町議会議員の方等に直接質問する座談会が開催することになった。この座談会を通して、ほぼすべての生徒が、「飯島がなくなってしまうのは困る。」「飯島のためにできることをやりたい。」といったふるさとを想う気持ちがさらに大きくなった。



iii 民間の方とつながる

【第4回ふるさと座談会

～自然を守る～

(9月8日)

第3回の座談会を受け、現在飯島町の自然を守る活動をしてくださっている方との座談会を行うことにした。ちょうど学年行事である傘山登山のガイドをしてくださるボランティアグループの方が講師を引き受けてくださり、ボランティア活動についてだけでなく、安全な登山の仕方についても伺うことができた。座談会を通して「町民の森 傘山」について更に知識を深めることができた。

(生徒の感想から)

～略～驚いたことは、里山クラブの皆さんは、登山道が歩きやすいようにいろいろ考えて直してくれたので、登る人はみんな感謝をしないといけないなと思いました。～略～調べるだけではわからなかったことが経験を生かして教えてくれたのでよかったです。また



【第5回ふるさと座談会

～飯島町をPRする～

(9月15日)

第3回座談会の講師の方から「米俵マラソン」の発起人であり、大相撲の土俵を手懸けるわら職人の酒井さんを紹介していただき、第5回座談会を行った。

そして、今後どんな活動をしていきたいか話し合う中で以下のような考えが出された。

- 米俵マラソン、飯島町をPRしていきたい。
- 地域貢献になるゴミ拾いやあいさつ活動をしたい。
- 米俵マラソンに参加したい。 など

【第6回ふるさと座談会～中間報告会～】は、1月12日に行った。町教育長をはじめ、町内の事業所の方など数名に来校いただき、今後の活動についてご助言をいただいた。

iv 米俵マラソン（11月26日）への参加

「米俵マラソンに関わりたい。」という生徒の声が多く、ボランティアスタッフとして参加させていただけないか問い合わせ、2学年全員の参加が決まった。自分がやりたいことに沿って、4つのグループに分かれ、グループ毎「どんな活動をすることが飯島町のためになるのか」を話し合うところから、生徒主体の活動が始まった。

生徒達自身の願いから決まったボランティアであったため、自分の分担が終わった後も、自分たちで考え行動する姿があった。特に、当日初めて出会った米俵マラソン実行委員に積極的に話しかけ、協働する姿は、本校の総合的な学習の時間で目指す姿であると感じた。

(生徒達が行った活動内容)

- イベントグループ：当日の運営、飯島町キャラクターとの写真撮影会など
- つくるグループ：「勝ち藁守り」「米俵」作り
- PRグループ：応援メッセージ入り飯島町のポストカード制作
- ボランティアグループ：マラソンコース周辺清掃

(生徒の感想から)

今日は米俵マラソンがありました。私は最終ランナーをやりました。～略～子どもの参加者を励ましなが
走れました。自分たちのボランティアで少しでも飯島を好きなり、飯島町を知ってもらえたらいいなと思
います。



② 格好いい大人講演会

ふるさと座談会やグループ活動と並行して行った「格好いい大人講演会」は、生徒の主体性を育てる心の教育となり、生徒のものの見方や考え方が多様化し、生徒の感想や行動に変化が見られた。「よかったです。」というような感想を述べていた生徒が、「これから～したい。」という自分の考えを書き加えるようになっていった。また、教師の指示を待つのではなく、「次は～といった活動がしたい。」と自ら動き出す生徒が増えていった。それが顕著に表れていたのが、米俵マラソンへの参加である。他人事にするのではなく、自分のふるさとである飯島のために、自分事として考え行動する姿への変容は、2学年の総合的な学習の時間で目指す姿そのものであった。

第1回	格好いい大人講演会	5月11日
	講師	清水 慎一 様
	演題	「傍楽（はたらく）」
第2回	格好いい大人講演会	11月5日
	講師	腰塚 勇人 様
	演題	命の授業～ドリー夢メーカーとして生きる～
第3回	格好いい大人講演会	12月5日
	講師	馬島 誠様
	演題	共生社会
第4回	格好いい大人講演会	1月26日
	講師	日笠 智之 様
	演題	全力で生きる

3 研究のまとめ

この1年、2学年生徒と職員で進めてきた総合的な学習の時間への取り組みは、課題であった「安易な読みかえ」「生徒主体の探究活動」を解決する十分な実践とは言い切れないかも知れない。しかし、生徒達がふるさとを「知れば知るほど」、ふるさとの人と「関われば関わるほど」、ふるさとへの想いは深まり、自ずと主体的な探究活動へと発展していくという道筋の確立にはなったのではないだろうか。今後はこの2学年の実践を元に、学校全体でふるさとに学び、ふるさとへ心を寄せる総合的な学習の時間についての実践・研究を発展させていきたい。(執筆担当者 教諭 鈴木 雅美)